

火も電気も使わず
どんなときも”温かい食事”を。

あったかフードボックス

災害時に、誰でも手軽に・安全に
温められる食品ストッカー。

「あったかフードボックス」は、発熱剤と水の反応で食品を温める再利用型の加熱容器。
火も電気も使わず、火災の危険性もないため、停電・断水・寒冷下の被災時でも
誰でもどこでも温かい食事を摂ることができます。

少しの水だけで簡単に使える！

発熱剤にカップ1杯
(180cc)の水を注ぐ
だけで高温蒸気が
発生。湯沸かし不要
で、食品を短時間
で温められます。

① 中ケースに
食材を入れ
蓋をする



② 外ケースに
発熱剤を置き
水を注ぐ



③ ケースを重ね
10～15分待つだけ



詳細は
こちらから



普段は食品
収納ストッカー
として！

火も電気も不要
安全・確実に
加熱できる



火災の心配なし
わずかな水のみで
使用可能



誰でも簡単操作
高齢者・子ども
でも安心



繰り返し使える
耐熱樹脂製で
何度でも使用可



多様な食品に対応
レトルト・缶詰・
アルファ米など



場所をとらない
スタッキング収納で
備蓄にも最適



私たちは
本気です！

災害時でも温かくおいしい食事を標準化したい！

火や電気が使えない災害時

常温または冷たい食事が中心



あったかフードボックス
があれば…

温かさが食欲を呼び
生きる気力と支える力の
源になります！



開発の想い

きっかけは、真冬の体育館で冷たい弁当を食べる子どもたちの姿でした。

「非常時こそ、温かい食事で力を取り戻してほしい」—

そんな思いが、この製品の原点です。

現在では、復旧作業や避難生活など、“支える人の現場”にも活用が広がっています。

一般社団法人 日本災害食学会
理事・関西支部長
有限会社山本商事 代表取締役

山本 潤一



製品に関するお問い合わせはこちらまで

〈製造販売元〉



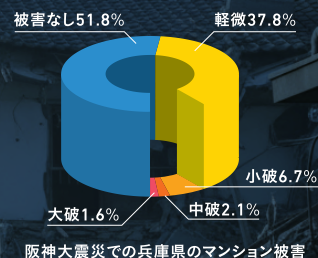
マンション防災の新常識



あったか**フードボックス**で在宅避難にいつもの温かい食事を。

👉 建物に留まる避難が主流に！

1995年1月17日に発生した**阪神・淡路大震災**、
神戸市や阪神地域では広範囲にわたり家屋の倒壊や火災が発生。
そうした中、新耐震基準の導入により多くのマンションが倒壊を免れ、
現在では「建物に留まる避難（在宅避難）」が推奨される地域が増えています。



マンションの89.6%がほぼ被害なし！

発災当時、電気・ガス・水道といった全てのライフラインが寸断。
食事は乾パン・缶詰・冷たい弁当などに頼らざるを得ませんでした。

電気：最大約260万戸が停電（応急復旧まで地震発生から6日間） ガス：70.5万戸の応急復旧完了は4/11（当初停止は約86万戸）

電気・ガスの停止で調理不能。炊き出しは負担が大きく非現実的！



👉 非常時の食事は「食べられる」ではなく、「温かく食べたい」へ。

＼ マンション防災の新しい備え ／

在宅避難では、各戸または共用部で温かい食事を確保する仕組みが必要です！

マンション防災における“食”の2つの考え方

自助の視点

個人で備蓄する場合、日常的に消費する食品を少し多めに備蓄する「ローリングストック」の手法が有効。

- ① 食べ慣れた食品を食べる
- ② 食物アレルギーに対応できる
- ③ 食品ロスの抑制につながる

日本災害食認証：常温で保管でき、6か月以上の長期保存ができ、調理せず食べられるもの

◎備蓄とともに、レトルト食品・パックご飯などを温める手段の確保が必要



共助の視点

「かまど型ベンチ」をマンション防災力向上認定制度の認定条件の一部としている地域がある。

災害時には炊き出し用資機材として活用でき、温かく栄養バランスの整った食事を多数の住民に提供可能である。

一方で炊き出し（大量調理）は入念な準備と被災者に過大な負担となることを認識しておく必要がある。



かまど型ベンチ

あったか**フードボックス**

は、火も電気も使わず、水を注ぐだけで食品を温められる
再利用型の加熱容器。飲めない水（雨水・川の水など）でも使え、被災時や停電時でも誰でも簡単に温かい食事を作れます。また、被災時だけでなく防災訓練や冬季の現場食にも最適です。



管理会社にとっての導入メリットと効果

共助に依存せずに温かい食事を確保

住民の自発的な防災備蓄意識の醸成

防災訓練を「体験型」に変えるツールに

「冷たい備蓄」から「温かい食事」への転換が、これからのマンションの信頼を高めます。